



NO.31

April 2003

CIEC Newsletter

お知らせ

2003PC カンファレンス

テーマ：進化する情報機器 / 進歩する人
 日時：2003年8月5日（火）～8月8日（金）
 会場：鹿児島大学郡元キャンパス

メーリングリストリニューアルのご案内
 CIEC@CIEC.or.jp を会員事務連絡用 ML と会員間情報交換 ML に分けました。詳しくは最終ページおよび「CIEC メーリングリスト活用の手引き」をご覧ください。
 新 ML 開始は連休明けを予定しております。開始日は会員事務連絡用 ML にて通知いたします。

個人会員	765		
教員	535	大学職員	23
院生	46	学生	16
生協職員	87	企業	28
その他	30		
団体会員	98	団体	
企業	36	生協	58
大学	1	高校	1
法人	2		

CIEC 会員状況 (2003.4.21 現在)

CONTENTS

< ニュース・トピックス >	
第9回鹿児島マルチメディア 教育フォーラムに参加して	2
CIEC 小中高部会第13回研究会報告	2
小中高部会学校訪問レポート	5
生協職員部会の設立	6
インタラクティブ教育研究会の設立	7
< CIEC 活動報告 >	
2003年度 CIEC プロジェクト事業審査結果	9
2003PC カンファレンス	
第1回プログラム委員会報告	10
第2回プログラム委員会報告	12
CIEC メーリング登録のお願い	18
< 新会員紹介 >	
青木 直史	15
小澤伊久美	
片岡 亮	
曾我 聰起	
深澤のぞみ	
山本 敏幸	

CIEC ニュースレター

2003年4月25日発行

発行：CIEC (コンピュータ利用教育協議会)

編集：CIEC 運営委員会

〒166-8532 東京都杉並区和田 3-30-22 大学生協会館

TEL 03-5307-1195 FAX 03-5307-1196

e-mail:ciec-jim@ciec.or.jp URL:http://www.ciec.or.jp/

「第9回鹿児島マルチメディア教育フォーラム」に参加して

2003年2月22日(土)、小雨が降り桜島も頂上は雲がかかっていた。第9回鹿児島マルチメディア教育フォーラムは鹿児島市の鹿児島湾に面した南日本新聞社内のみなみホールを会場にして行われた。鹿児島は今年のPCC2003の会場となる土地である。今回この鹿児島の小・中・高校の情報教育の実態を知るためにフォーラムに参加させていただいた。このフォーラムは1994年より、地元の先生方を中心にした鹿児島県マルチメディア教育研究会が1年に1度開催するフォーラムであり、この日も鹿児島を中心に熱心に活動している小・中・高の先生約120名が集まった。フォーラムを運営しているのはPCC2003実行委員会にも所属している鹿児島市立西陵中学校の川端成實先生である。

開会挨拶が行われたあと、研究会のメンバーからのシンガポール視察報告が行われた。この会では昨年8月に先進国の情報教育の実態を知るべく、会員を中心とした17名が自費(!)でシンガポールを視察してきたということである。シンガポール教育省を訪問し、情報教育のMaster Planについて説明を受けたこと、いくつかの特色のある小、中学校を訪問してきたことが、5名の先生のリレー方式による発表で軽快に行われた。どの先生も日本より3歩先を進む国として、自分たちの進むべき道を熱く語っているのが印象的であった

次に授業実践報告が小・中・高の各校種の先生方から行われた。小学校の先生は算数の授業でのCCDカメラの活用について、中学校の先生は社会科における調べ学習についての報告が行われた。「なぜコンピュータを使うのか」という問いに対して「授業をわかりやすく楽しいものにするため」という答えが新鮮に聞こえた。高校は県の指定を受け先行的に教科「情報」の授業を行った出水高校の発表であった。情報Bに近いような情報科学的な内容の実践に対しての生徒の反応などが発表された。

午後の最初はアトラクションで始まった。地元の方の薙刀踊りなども含む創作舞踊が行われ会場の雰囲気は盛り上がった。情報教育とは全く雰囲気を異にするものの出現に驚いたが、このような雰囲気がこのフォーラムの楽しさを作っていることが理解できる一面であった。

その後今回のメインであるシンポジウム「授業が生きるITの活用～その現在・未来」が行われた。この会の会員でもある鹿児島大学の園屋先生をコーディネータとして、行政的な立場として鹿児島県教育庁の寺園先生から鹿児島県の情報教育や環境の現状が発表された。先進的な試みをしている学校も多いが、インターネットの活用や校内LANの整備状況がまだまだである状況も伝えられた。また、青葉小学校の廣原先生からは小学校での活用の状況についての報告があった。金城学院大の長谷川先生(今年度より中学校から大学に移ったとのこと)からは中学校での現状や大学ではこれからどうしていくかの問題が出された。地元での先進的な取り組みを行っている神村学園の神村先生からは、小、中、高、専門学校のすべての生徒にノートPCを活用させ、WBTの教材による資格取得のための教育について語られた。会場からも多くの意見が出され、シンポジウムはすすめられた。「名人の先生の授業をどんな先生でもできるようにすること」や「先生も生徒もすべてがコンテンツ」といういくつかのキーワードとなるような言葉が出され、シンポジウムはまとめられた。

このフォーラムに参加して鹿児島の先生方の情報教育にかけける十分な気合いを感じた。鹿児島の元気な先生方が、この夏の2003PCCでも再び集い、情報教育に関して熱く議論が交わされることを期待している。

(報告 大橋真也 千葉県立東葛飾高等学校)

CIEC 小中高部会第13回研究会 報告

テーマ：ケータイと学校教育 part2

- ケータイから読み解く現代の学校教育 -

1. 「携帯電話と社会 - メディアの中の子どもたち」
佛教大学社会学部 富田 英典 氏
2. 「学校教育の中でモバイルツールの可能性を探る」
千葉県柏市立中原小学校 梅津 健志 氏

日 時 2002年12月14日(土)

会 場 大学生協会館(東京杉並)



1. 「携帯電話と社会メディアの中の子どもたち」

佛教大学社会学部 富田 英典 氏

知人

まず、携帯電話にかかわる最近の調査・統計データより報告があった。

用件電話 | お喋り電話

携帯電話の所有率は高いが、ただし世界のトップというわけではない。高齢の方々もとりあえず持っている状況である。所有者の73%はメール等の利用を含めて何らかのかたちで使っている。特に、若い人ほど、頻繁に使っている傾向がある。その利用時間は全体では10分以下だが、10代では40%以上が1～3時間以上となっている。私的な情報発信行動において、16～29歳では電子メールがダントツである。連絡がとりやすくなった、家族が安心するようになった等の利便性を多く感じているようだが、必要のない電話をすることが増えた等、完全に満足しているわけではないようである。

instrumental - - - - ・ - - - - consummately

ビジネス電話 | IntimateStranger との会話

ストレンジャー

匿名性

つぎに、"Intimate Stranger (親密な見知らぬ人)"と富田先生が名付けられた概念を紹介いただいた。

他人 | IntimateStranger

ポケベルの存在で利用者の低年齢化が進んだのだが、ベル友に見られるように親密性と匿名性が交差する関係が生まれてきた。会わないからこそ、かえってリアリティーが生まれ、友情、ときには恋愛感情が生まれることさえあった。この様な関係を "Intimate Stranger (親密な見知らぬ人)" と名付ける。これは、匿名性を前提としたメディア上の親密な他者ということである。親密と匿名は、本来、水と油の関係であるが、大都会のように気楽に住める匿名性の空間、いつでも簡単に関係を切断することができる安心感を持った関係として成立している。Intimate Stranger 現象はパソコン通信、伝言ダイヤル、テレクラ、900番サービス(米国)、ダイヤルQ2、パーティーライン・ツーショット、ベル友、メル友などに見られるが、映画「ユー・ガット・メール」、テレビドラマ「WITH LOVE 近づくほどに、君が遠くなる。」などにも匿名性と親密性が交差する世界として描かれた。カナダ、日本での調査では5人に1人が「メル友」有りと答えている。出会い系サイトについても携帯利用者の3人に1人が使ったことがあるとの調査結果があるが、そのうち、「いやな思いをしたことはない」は82.6%ということで、楽しい空間として受け入れられているようである。インストゥルメンタル(道具として)からコンサマトリー(そのこと自身が目的)へメディアコミュニケーションの変化が見られる。

- - - - ・ - - - - 親密性

顔見知り | 友人

|

具体的なメディアコミュニケーションの方法として、インスタント・メッセージ、ボイスチャット、ビデオチャットなども使われている。

この他、残り少なくなった時間の中で、以下のような興味深い内容を説明いただいた。

不協和を引き起こす、ふたりの「私」ということで、オンライン・ベルソナ (S. タークル) 地図にないコミュニティ (G. ガンパート) サイコロジカル・ネイバーフッド (S.D. アロンソン) 「社会的な場」と「物理的な場」の分離 (J. メロウィッツ) 「オリジナルの私」によって否定される「ほんとうの私」(富田) などがある。

情報を発信しても誰が受け取っているかわからないのだが、誰かに知って欲しい認めて欲しいと考えるもので、「誰かが私に恋してる」ということは自らの存在証明であり、「誰も気づいてくれない」はその逆となる。

一番魅力的なコンテンツは「人」であり、パーティー・ライン(電話)、ツーショット・ライン(電話)、「ベル友」

(ポケベル)「メル友」(PC) 有料の緊急通報サービスなど、いずれも、“人の顔”が見えていないといけない!!

ベンヤミンの述べるアウラは本来、オリジナルなものにはオーラがあり、コピーされたら消滅すると考えるわけだが、鈴木光司の小説「リング」「らせん」に登場する呪われたビデオテープや不幸の手紙、チェーンメールはオーラがコピーされるわけで、まさにアウラの復活と言える。

誠実であることは昔は「相手に誠実」という方向であったが、今はいつの間にか「自分に誠実」という方向に誠実さのベクトルは向きを変えてしまっている。まさに、自分の持っているアウラが反射していると考えられる。

最後に、『『高齢者に何が起こってくるか!』がオモシロイ。その中にメディアがおかれている』と述べられ、ご講演が終了した。限られた時間の中で、社会学の見地でケイタイ学をお示しいただき、たいへん興味深く拝聴することができた。

2. 千葉県柏市立中原小学校梅津先生のご講演「学校教育の中でモバイルツールの可能性を探る」より

状況・環境説明

千葉都民が住んでいる街で960人28学級の学校規模である。研究指定は受けていないが「学校インターネット1」として、1.5メガCATVをインターネット環境として利用している。今は12年ぶりに3年担任として40人を受け持っている。96年に受け持ったクラスで親とポケベル通信。これがモバイルツールとの出会いであった。

教員のネットワーク活動参加体制について

正統的参加論 = 先生がネットワークの良さを実際に体感することにより輪を広げてゆく / 校内LANでメッセージソフト「ベタろう」を活用する / 危機管理的に携帯電話を推奨(メールも) / 行事予定携帯サイトを試験運用 / 保護者からのメールにも携帯メールが増える / 非常時用の携帯サービスを運用する。

子どもたちにとっての利点らしきもの

いつでも連絡がとれる / マイデータベースを作ってゆこう (言葉を選ぶ / 俳句17文字 / キーボードより入力が楽 / 障害

を持った子も) / 実験を写真でレポート / 納得がゆく / 携帯の向こうに人がいるという相手意識 / 利用してもらいたいと思えるものを / 返事 / インターネットの日記サイト / 「ヤ

ブース」を利用しネットワーク経由で書き込み / 筑波山遠足 / 目的をもって調査も / 遠足プロモーションビデオに生かす / テロも考える

モラルについて

よく使える方法を最初に教える / 遊びに使う / 勉強に使う

質疑応答

Q: IT化?

A: 最初は電源が繋がっていなかった
今はパソコンを使うのは普通になってきた

Q: 授業の中で他の先生は?

A: 調べ学習、表現が中心。1年は詩をならべる。
・教室にも
・コンピュータ室開放

一太郎スマイルで研究紀要をCDにしよう / 年間指導計画をエクセルで作成しハイパーリンク状態にしよう / 通知票 / 形成的評価を吸い上げる / さわらざるを得ない状況 / 便利だという声 / 児童のパソコン所持率は6年生のクラスで5人程度

3. 全体討議

Q: 「インターネット」のチーム編成は? 中原小梅津先生への質問

A: 中古パソコンの活用や、3系統の総延長6000メートルのLANを引くなどの活動を行っている / バンド活動もやっている。

Q: あとくされのない環境にはツールの影響があるのか? つながりやを嫌う本質があるのか? 佛教大富田先生へ

A: 本質ではないと思う。ベネッセの白書で自分の特性として1位は「友達が多い」。身近な人との関係も僕らとは違う。冊子「少年育成」に予定異常症候群(スケジュール必要ない・空白をうめたくなる・空白がいっぱいあると友達が少ないように思われる)について掲載。浮遊している自分をつなぎ止める。



小中高部会学校訪問レポート

Q：情報教育 これまでのコンピュータの世界をうまく活用 情報が伝わるもの 情報教育はどうなる

A：佐藤たくみ先生 メディア反射型

カラオケ研究 / はまらないと見えない / 本人になる / 向こうは向こうで解釈している / そのままが伝わっていない / それを理解させる！ / チャットでは勝手に映像を描いている / お互いにわかる / メディアをはさむと余計かわって伝わることを理解させる

Q：メディアは自分を映す鏡。波長のあうところを探し、自己満足的につきあう。実体を持ったときに悲惨な事件につながる？ テレビ会議では相手の実体が見える！

A：社会的性格論 / リースマン「孤独な群衆」 / 伝統思考型 内部思考型 他人志向型

ナルシズム / 私ってなんてすてきなんだろう / おたく池に写っているのがメディア / 病気？ / みんなナルシスト / 健全 / 映像 / テレビ電話 / テレクラ / 顔だけ見せない / 目だけ見せない / だれかわからない / 顔が見えても一生会うことがない / 個人認証 / いちおう大丈夫ということにしておきましょう / ネットの世界では個人認証できない / 信じるかどうか / 結局は匿名性(うまくゆくのとは 文字だけ 映像だけ × 声だけ(元にイメージが戻せない)) / 顔を出さない方が

Q：教育出版 / 使われ方次第だなあ / 正しい使い方

A：ゼミの掲示板 / 遊びの感覚のメール / 世界中に普及 / みんなはまっている / 技術決定論 / うそだろう / 機械精神 / これにひっかかっている / 人間関係も変わってくる / 社会を変えてゆく / 文化決定論 / なぜか同じ使い方

Q：高校への思いは？

A：小学校 教科で使ってもらえれば。よさ。メディアはファンクション。

大学 困っている。高校までで習って来る。毎年カリキュラムを変える必要。個人差。

(文責 小西浩之 滋賀県立日野高等学校)

都立大学生田教授が校長先生の都立大学附属高校を訪問してきました。

2003年2月4日の夕刻、今は大学のない東急東横線「都立大学」駅で待ち合わせた。目黒らしい柿ノ木坂、熊野神社、という地名を見ながら、落ち着いた街並を5分程歩いて、左手に高層住宅と近代的なホール(大学キャンパス跡地にたっている)を見て曲がると、都立大学附属高等学校がある。校門を入ったところで、短いスカートの女生徒が数人、マフラーを襟元でキュッとしめて、男の先生と立ち話をしていた。生田校長が沖縄修学旅行の写真を手に生徒達と談笑中、待っていると「修学旅行で撮影係(?)だったから」とのこと。社団法人都立大学附属高校「父母会」の名で沼津バス旅行の申し込みポストが見え、廊下に昼食時用のやかんがきれいに並んでいた。ちょうど全日制の生徒とちょっと早い定時制の生徒が入り交じる時間帯である。伝統と自由の入り交じった空間を感じた。

広々として、仕切るとちょっとした委員会ができるという校長室で担当の小池良夫先生(英語)と生田校長からお話を聞く。

都立大学附属高校は東京都立大学の附属高校であるが、同時に都立高校204校の中に位置していて、生徒の受験の仕組み、教員の移動は他の都立高校と変わらない。従って今都立高校が置かれている改革の中にあり、情報教育の状況もまた、その一つとして受け止めるべきである。

パソコン室は6年目を迎えたマッキントッシュ Lc7600が40台、林立している。次の更新で買い取りかリースかが課題になっている。ADSLで外に繋がっているが、40台が一斉にアクセスするとパンクするので、英語の授業では一度使って止めてしまった。現在全日制の美術の授業でCDジャケットのデザインを行っており、マックファンにも取り上げられた。すばらしい体育館の壁に、きれいな作品が飾ってあった。家庭科の授業で栄養計算もしている。また、部屋は定時制の美術の授業で、ちょうど使おうとされていた。要するに10人から20人の授業でつかわれるのがちょうどいいらしい。もちろん、社会教育講座の「めぐろシティカレッジ」のパソコン入門もここで行われており、7年間続いている。

2002年度、年間500時間という情報アドバイザーの派遣を活用して、ドリームウィーバというソフトを使って公式ホームページ (<http://www.toritsudai-h.metro.tokyo.jp/>)を立ち上げた。校長だより、クラスマッチ、文芸部活動、父母会活動など、結構更新されている。メディアスタッフという生徒のグループと小池先生が公式ページ更新の管理者である。メディアスタッフの活動は、とても活発である。メディアスタッフは、学校行事や部活動を紹介するページを独自につくり、出展コンテンツとよばれるコーナーにまとめられている。実に楽しい企画である。パソコン室の生徒への解放は月、水、金の放課後、これもメディアスタッフが管理している。

「情報の授業が始まって、アシスタントはつかないし、担当は大変である。本校は夏の講習会を受けた人間がない。英語は対象外だから、自分は受けられない。講師でスタートするか、誰かやるしかない。」教科「情報」がこの春から開始といっても、1年生から始める学校は東京都では1/3、2年生から始めるところもあり、ほとんどの進学校は3年で始める。都立大学附属も2年に置いている。ということは、2004年度開始ということである。CIECに望まれるものはなにか。きちんと考えてみるのが大切だと感じた。

都立高校は、今、改革推進計画が進行している。それぞれの特質を生かして、さまざまな形態に改革が進行している。都立大学附属高校は大学が八王子に移転した1991年から附属高校の特質を生かして、高大連携教育の視点から中高一貫6年制への改組を東京都教育委員会に求めてきた。その経緯もあって、都の第2次高校改革計画で中高一貫6年制実施校に指定されたが、それに先立って、校内に6年制委員会を設けて検討してきた(小池先生はこの6年制委員会のひとりであった)。内容は全体の教育課程や教科ごとの指導計画、入学者選抜、学校建築、大学、地域との連携など多岐にわたっている。この内容はその後、都教育委員会の基本計画の中に一部は取り入れられたという。昨年度、基本設計、今年度は実施計画をすませ、この春からは校舎の全面改築に入る。都立大学附属高校の人気は高く、この春の入試も、高倍率になった。都立大学の附属を生かした教育活動が展開できるように、新しい中等教育学校も「都立大学附属」であり続けられるよう、心を砕いているという。

(文責 仲田 秀 小中高部会)

生協職員部会の設立

本部会は、長らくPCカンファレンスの起ち上げ、CIECの起ち上げに大学生協職員として関わってきた有志のよびかけで、2002年12月に発足しました。よりよい教育・研究環境の実現に少しでも貢献したいという素朴な願いから、教育・研究に貢献する生協事業の可能性を追求する研究会、教員・学生・生協職員の立場を超えたネットワークづくり、地域における学びに貢献するとりくみなど、多様な活動を計画しています。

発足に先立ち、「2002PCカンファレンス」では大学生協企画のなかでよびかけをさせていただきました。100名以上が集まったこの場で報告いただいたなかから、

- ・ 大学の変化
- ・ 学生の学びと成長に対する先生方の思い
- ・ 教育や学びに貢献する生協事業の可能性

について学び、考えることができました。

また2002年12月には、大学生協連全国総会と時期をあわせ、第1回研究会を開催しました。田井修司先生(ちばコープ理事長/元立命館大学教授)に講演をいただき、

- ・ 暮らし・地域
- ・ 暮らし・地域の願いに応える生協事業の方向性
- ・ モノや物流を発展させるヒトとヒトとのネットワーク

など、対象に貢献する生協のこれからのあり様について考えました。教育・研究現場における“暮らし”と生協事業との関係を考える上でも貴重な場になりました。

あわせて、こうした場で多くの先生方から期待と応援の言葉をいただいたことを報告し、御礼申し上げます。

現在、月1回の世話人会とメーリングリストを活用し、情報や意見交換をすすめています。

当面の予定として、

1. 6月、8月(PCカンファレンス)、10月、12月(大学生協連全国総会時)と4回の研究会を計画し、準備をすすめています。

2. 研究会の準備と並行して、先生方や学生・院生を含む学



びのネットワークをつくりたいと考えています。

3. ちばコープと協力して、地域における学びやPCリテラシに貢献するとりくみを計画しています。また11月末に千葉大で開催される、2003年子育て文化協同千葉交流会『子どもと文化・交流フェスタ～みんなでつくる夢のまち～』へ関わることができそうです。

これまでわたしたちは、PCカンファレンスやCIECをつうじて全国の教職員・学生・院生の方々と接するなかから、教育や学びについて多くのことを学び、考えてきました。そしてこうしたとりくみにコミットできる大学生協の可能性や自分自身の働きがい、生きがいを感じてきました。わたしたち生協職員自身が学び、考え、成長し、生協の発展を目指すことが、よりよい教育・研究環境の実現に貢献する道であることを願っています。

いま、さらに多くの仲間たちとともに、同時に先生方、学生、院生の方々とのネットワークを結びながら、CIECの発展と生協事業の発展、ならびに生協職員の働きがいと成長をテーマに活動をすすめていきたいとおもいます。

(文責 仲田 秀 生協職員部会)

インタラクティブ教育研究会の発足

1. 研究部会の名称

インタラクティブ教育研究会

2. 代表者

楠 房子(多摩美術大学)

3. 世話人(研究部会開催の中心的な方、連絡先)

佐伯 胖(青山学院大学)

石田 晴久(多摩美術大学)

吉川 厚(NTTデータ ビジネス

インキュベーションセンター)

4. 活動目的

大学・現場の先生方・企業という枠にとらわれずにインタラクティブな教育について考え実践し、成果を報告することを目的とする。

5. 年間の活動計画

1年に1回のシンポジウムを開催し、実践の報告を行うとともに参加者の交流を行う。

6. 設立主旨と呼びかけ文

日本は高い教育水準を誇り、そのために産業は大いに進歩してきた。しかし、今日の教育現場をみると、学級崩壊という言葉のとおり、かろうじて生徒が学校にいるに過ぎなくなってきており、知の喜びをしらしめる機関としての役目を担える状況になくなってきている。この原因はもちろん一つではない。学校が形式化された知識を現実社会とマッピングしないで形式的に伝えてきたことの弊害が起こったとも分析できるだろうし、社会の変化に学校だけが取り残されてきた結果かもしれない。また、社会が求めている人間像と学校が作ろうとしている人間像が乖離してきたせいもあるだろう。教育が営利的に扱われ学習者に迎合するあまり学ぶ姿勢を失った子供たちを大增産してきたこともあるだろう。様々な次元での問題が集約されて、毎年2%ずつ学力が低下しているとまで言われるようになってしまった。また、このことは学力だけの問題にとどまらない。人と話せない、自ら何かにかかわろうとしないという無気力な子供たちを作り出していることにもつながっている。今や人として

の存立が危ぶまれるような子供たちを加速的に生産する場に教育現場がなりつつある。そしてこのことは教育のみならず、産業界、否、社会全体の問題でもある。

そこで、かような状況に歯止めをかけ、能動的な人格を形成していくためにあらゆる次元で学び、創造し、自らが社会に参加していくような社会-教育体制を醸成すべくIE協会を設立する。そこでは、学びを単に知を受け継ぐものとして捉えず、問題を解決していくあるいは創造していく過程におくこととする。すなわちLearnerではなくcreator、producerになることとして捉える。知を体系化し形式的な知を現実問題とグラウンドするように教育と社会との境界を取り除き、使用可能な創造的な実践知を創造しながら学ぶ環境を創製する。

そのために、人の創造の糧となる新しい道具を作り出したり、匿名性のある対話から徐々に対面的な対話を形成するためのインターネットの利用を行ったり、社会とつながって創造に埋め込まれた学びを行う場としてのコンピュータ利用などにより、個別論ではない人・道具・社会の3項組で実践的な解決策を推進するありとあらゆる活動を行う。

7. メーリングリストの名前

iej@ciec.or.jp (研究会参加者用)
(Interactive education の意味から)

8. メーリングリスト管理者の氏名と連絡先

楠 房子 多摩美術大学情報デザイン学科

[事務局からの質問事項と回答] 活動イメージについてお聞きしました。

Q1.1年に1回の研究成果報告会はわかりましたが、日常の活動イメージはどのようなものでしょうか？

A1. 会員がおのおの活動をしていて、それをMLでやり取りをしたり、また、特別なプロジェクトを立ち上げて、それを支援したりします。

いままで、佐賀県の教育にはかなりかかわってきました。現場の先生と県のかたがた、そして地元の大学の先生と協力してプロジェクトは進めます。

Q2. CIEC全体では、研究会や研究大会を行っています。そこに合流するイメージでしょうか？(年数回の研究会、PCカンファレンスなど)

A2. 合流でよいかと思えます。いままで2回大会を開きましたが、1999年に行われたのは日経BP主催でした。その中でデモセッションが、先端に触れるということで開催していますので、大変好評です。それを続けたいとも思っています。ワークショップを単独で企画する話は出ていますが、まだ実現したことがないのでわかりません。

Q3. 年4回発行のNewsletterや年2回発行の会誌での発表、報告や呼びかけ等を行っております。

A3. これにはぜひお願いしたいところです。

Q4. CIECや事務局に期待することがあればお教え下さい。

A4. やはり、現場の先生と共同ですすめていかないと、教育そのものを面白くできないと考えております。その意味で、CIECさまに期待するところは、大学の先生方、現場の先生方、そして企業との融合だと捉えています。事務局様にはその橋渡しの場をお教え願えればと思います。



2003年3月7日プロジェクト事業審査会 2003年度CIECプロジェクト事業審査結果 承認の件

10件のプロジェクト事業申請について審査を行い、以下のような審査結果となりましたので報告します。

1. スケジュール

1月7日 2003年度CIECプロジェクト事業募集開始
2月15日締め切り プロジェクト事業申請書10件受付
2月22日プロジェクト事業申請審査会実施
3月5日再審査該当者回答締め切り
3月7日プロジェクト事業申請審査会MLで最終審査結果確認
3月20日CIEC運営委員会、理事会の議決を経て、申請者に回答予定

2. 審査結果(概要)

- (1) 10件の申請を受付、内2件を不採択とした。
- (2) 8件のうち、6)研究計画概要、7)成果の公表予定と方法、8)申請予算額の内容について、審査委員より意見の出された5件について再度メールによる確認調査を実施した。
- (3) また、申請受付後行った減額可能性に関する事前調査回答も考慮に入れ、プロジェクト事業費配分額の検討をおこなった。
- (4) その結果8件の申請について以下の通り採択とした。
- (5) また、申請内容、減額措置との関係で、1)CIECで具備する備品の購入、2)部会活動補助費用の予備費からの適用、3)次年度プロジェクト公募に関する検討事項について、プロジェクト審査会として運営委員会、理事会に提案することとした。

3. 採択したプロジェクト名と支給額(受付順)

- (1) 「学生と共に作るマルチメディア英語学習教材」
代表者 竹内勝徳(鹿児島大学)支給額20万円
- (2) 「統計科学教育・学習のためのデータ及び解析シナリオ集の作成」
代表者 宿久洋(鹿児島大学)支給額30万円

(3) 「留学生のための科学技術日本語教育 e-Learning 化に伴うコンテンツ制作用テンプレートの開発研究、及び同 Learning Objects 発信システムの検証と開発研究」

代表者 山本敏幸(金沢工業大学情報処理センター研究員)支給額30万円

(4) 「情報環境支援プロジェクト」(小中高部会)

代表者 奥山賢一(竜王町立竜王小学校)支給額40万円

(5) 「次世代型 e-Learning 規格に基づくマルチモーダル外国語学習教材の制作」(外国語教育研究部会)

代表者 野澤和典(立命館大学)支給額30万円

(6) 「情報教材作成プロジェクト」(小中高部会)

代表者 武沢護(神奈川県立厚木南高等学校)支給額40万円

(7) 「SMILを用いたMulti-Media教材の作成と授業への適用に関する実践的研究」

代表者 森夏節(酪農学園大学)支給額30万円

(8) 「大規模中国語語法コーパスを利用したWeb中国語動詞句辞典の開発」

代表者 砂岡和子(早稲田大学政治経済学部)支給額30万円

2003PC カンファレンス 第1回プログラム委員会報告

日時：2003年1月26日(日)午前10時～午後1時30分

場所：鹿児島大学郡元キャンパス 喫茶ガロア

出席：佐藤、板倉、矢野、石原田、宿久、熊澤、竹内(以上鹿児島大学教員)、桜井(鹿児島大学学部生)上村(北九州市立大学)、末永(鹿児島純心女子短期大学)、川端(鹿児島西陵中学校)、福島(九州事業連合)、松田(CIEC副会長/立命館大学)、小野(東京大学)、吉田(摂南大学)、武沢(厚木南高校)

オブザーバー：橘(CIEC小中高部会/早稲田大学高等学院)

欠席：矢部(副会長/信州大学)、大岩(大分大学)、若林(京都大学)

事務局：小林、松崎、安田、高村、森園、斎藤、野口、石川、羽田

議題および討議、報告事項：

1. 第1回実行委員会開催報告

(報告書配布による確認のみ)

2. 第1回実行委員会以降の実施事項に関する報告

事務局から以下の内容について報告し、確認をした。

(1) 実行委員会メーリングリストを通じて確認した事項

・全体講演会の講演主旨および講演者の決定の確認
02.12.16

・開催案内挨拶文の確認 02.12.19

(2) 分科会担当に一任して実施した事項

・分科会レポートの募集案内作成(特に、参加資格の表現など)

・CIEC会員、大学生協関係者、過去のPCカンファレンス参加者に発送

(3) 広報担当に監修を一任して実施した事項

・2003PCカンファレンスホームページ案内のアップ

・新規Web申し込み書の作成と受付実施

(4) 事務局実施事項

・文部科学省、鹿児島県教育委員会、鹿児島市教育委員会への後援申請

・鹿児島大学長への名誉実行委員長就任依頼分の作成(実行委員長と調整済み)

3. 2003PCカンファレンス実施計画に関する確認と討議

各担当実行委員からの報告および提案に入る前に、各企画担当との調整による全体運営スケジュールの変更提案について説明を行い、最終的に各企画担当からの提案、報告も含めて確認した。

(1) 全体運営スケジュールの変更確認は以下

(<http://www.ciec.or.jp/event/2003/date.html>)

[1日目/5日(火)]

・当初計画にあったITフェアプレオープニングレセプション(名刺交換会)については、会場変更の関係で中止とした。

・CIEC総会は、全体会場(稲盛会館)でシンポジウムが終わり次第実施し、その後シンポジウム参加者による「本音で語る情報教育」参加者トーク(仮称)を実施する。

[2日目/6日(水)]

・ポスターセッションは、2日目(6日)、3日目(7日)の12:45～13:45の間をそれぞれ発表時間に割り当て、各々奇数番の発表、偶数番の発表とする。

・開催地企画は、「語学教育から国際化教育へ(仮称)」のテーマで、14:00～18:00まで行う。

・レセプションは、当初予定より15分間遅らせ、18:15～20:00とする。

[3日目/7日(木)]

・ITプレゼンテーションは、14:00～15:10とし、2コース(計6コマ)程度とし、テーマを分ける。

・大学生協企画シンポジウムは16:30～18:00とする。

・国際交流企画講演会を新規追加企画として、16:30～



18:00 に設定する。

・イブニングトークは、当初予定より15分間遅らせ、18:15 ~ 20:00 とする。

・ワークショップを「国際標準規格に基づくWBT教材の作成」のテーマで新規追加企画として、16:30 ~ 18:00 に設定する。(なお、少人数のため、イブニングトークとバッティングする事はない)

(2) 各企画、行事の進捗報告と確認内容

[1日目/5日(火)]

1) 全体会・講演会・シンポジウム関係

・全体会での挨拶を大会実行委員長と学長挨拶の2本としていたが、小中高の参加を高めるために、鹿児島県教育長の挨拶を検討することとする。

・講演は、村上陽一郎氏に決定済み。(講演テーマは2月中にいただく予定)

・シンポジウムテーマは「情報教育、2003年以降のゆくえ」に決定。小中高の現場でコンピュータ教育を実践されている先生と大学で情報教育を担当または詳しい先生にパネリストをお願いするとともに、教科情報に関して影響力を持つ先生に進行役をお願いし、CIECからの提言をまとめていく。

・ストリーミングの実施についても検討する。

2) CIEC 総会

・シンポジウム終了後直ちに開催することにより、総会参加者を増やす。総会は、CIEC 研究部会への参加を高めるなどの紹介型の議事進行を行う。

3) 参加者トーク

・シンポジウム参加者にテーマを絞って語り合う場を提供する。テーマ設定については、シンポジウム会場で事前集約し、会場設定等に活かす方向。

・飲み物および軽食を用意する。(参加者負担)

[2日目/6日(水)]

1) 分科会関係(2日目以降)

・分科会の本数が減数した場合の調整は、開始時間を遅らせる・昼休み時間を多少延ばす(5~10分まで)等での調整で判断し、3日間の日程については変えない。

・分科会(ポスター、ITフェア、シンポ等も同様)での発表に際し、インターネット環境が使えるよう整備すべき要件を早急に検討する。

・分科会終了後に、会場にて午後から実施される企画についての参加案内(当日チラシ)を行う。

2) ポスターセッション

・会場奇数番号の配置の発表者についてのプレゼンを行う。

・ポスター展示期間は6日10時~8日12時までとする。

3) 開催地企画

・「語学教育から国際化教育へ(仮称)」のテーマで、特別講演2本1時間30分(BBC役員、サテライトニュース松田社長を予定)、研究発表・事例報告を産学協同で2~3本75分、SCORM 企画の概要紹介と次世代e-Learningプラットフォーム製品デモのセミナー55分を実施する。休憩各10分

・会場は、稲盛会館を予定。ストリーミングも検討。

4) レセプション

・生協食堂にて実施する。

・ITフェア、ITプレゼン協賛企業については、1社2名までを招待とし、情報交換の場とする。

[3日目/7日(木)]

1) ポスターセッション

・会場偶数番号の配置の発表者についてのプレゼンを行う。

2) IT プレゼンテーション

・テーマ別に2コース同時帯に設定。各コースを35分プレゼン+10分休憩の3コマとする。

・ITプレゼンと並行するメイン企画は組まない。

3) 国際交流企画

・特別講演として、アジア物理教育ネットワークの事務局長の海外招聘を計画。

・講演要旨を先にいただき日本語に訳して配布。講演は時間との関係で訳を入れない。質問については、簡単に説明を入れる。

・海外招聘のための交通費、謝金はCIEC負担とする。

4) 大学生協企画

・CIEC 生協職員部会の研究会としてシンポジウム計画

5) イブニングトーク

・参加者討論テーマ、運営公募型で実施。

6) ワークショップ

・テーマ「国際標準規格に基づくWBT教材の作成」で、30人程度の体験実習。

・実施会場の手配および作業環境(機器)についての検討を行う。

[4日目/8日(金)]

・大会オプション企画として、屋久島観光コース(1泊2日延泊可)と知覧・指宿観光コース(1泊2日)を実施し、参加者を募集する。

(3) その他の企画など

1) ITフェア

・ITフェア協賛企業を1社2名まで、レセプションに招待する事を提案する。

・1ブースの大きさは、場所の関係で従来の1スパン180cmに戻す。

・1ブースの協賛価格は10万円に据え置く。地元業の協賛費を下げる対策としては、地元コーナーを作りスペースを分割することを基本に置く。

・ITフェアの参加動員を増やすために、インターネットカフェ、ドリンクサービス、近いところにクロークの設置、休憩所の設置を目指す(スタンプラリーは継続)

・ITフェア営業時間は、初日10時~18時、2日目10時~16時とする。

2) 学生企画は次回具体化した段階で企画に入れる。

3) オプション企画

・半日、1日コースのオプション観光、夕方からの錦江湾水中花火遊覧については大会企画とせず、ご家族同僚者のお薦めツアーとして紹介を行う。

4. 2003PCカンファレンス運営計画に関する確認と討議

(1) 開催場所(原案)に関する確認

・稲盛会館、総合教育研究棟、共通教育棟大講義室、生協食堂を会場とする案事務局から提案し、その方向で、会場確保を確認した。

・総合教育研究棟1階、2階のITフェア開催は冷房設備の関係上無理と判断し、別スペースでの開催とし、そのために新たに分科会等の会場確保を行うことを確認した。

(2) 設営業者決定 以下の通り確認した。

・設営業者は、株式会社クイーン工芸に決定

・コスト削減のため、全体講演会会場の一文字看板は中止、プロジェクタ投影。

・POP案内関係は、九州事業連合に依頼

(3) 後援依頼に関する件

これまでの後援団体依頼に加え、以下の通り後援依頼を行うことを確認した。

・教育系新聞社に後援依頼(宣伝のため)

現代教育新聞社、日本教育新聞社、教育家庭新聞社

・地元新聞社

西日本新聞社、鹿児島新報は、取材依頼とし、無理に後援団体とはしない。

・地元テレビ局、ラジオ局、ケーブルテレビ局など

NHKは、後援をとり、宣伝と取材協力を依頼する。他の4局は取材要請とする。

・地域生協など

全体会、講演会、シンポジウム等への参加を要請する。

(4) ポスター作成の件

・後日、メーリングリストにて、ポスター原案を公開し、批評を聞くことを確認した。

(5) 分科会レポート発表方法に関する確認の件

以下の内容について検討することを確認した。

・インターネット環境が使える方向で検討する。(分科会、ポスター、ITフェア、プレゼン)

設定時間がかかることが予測されるため、プロジェクタに加えて、パソコンの手配を検討。ただし、インターネット環境を使わないパソコン持ち込みはこれまで通り



優先する。

これまで発表者の持ち込みパソコンの機器を聞いていたが、ほとんどの機種が接続可能で、臨時用の代替えパソコンも用意するため、集約をやめる。

5. 今後のスケジュール

2003年2月6日(木) 東京事業連合取引先へのPCC協賛の依頼、連合会取引先、九州事業連合取引先、ほかへの依頼発送

2003年2月28日(金) レポート応募締め切り

2003年3月16日(日) レポート採否判定会議、時間割編成会議

2003年3月21日(金) 第2回プログラム委員会(リーフ掲載内容の決定)

6. その他

開催地(九州全域)で、レポート50本。内、鹿児島で30~35本のレポート獲得を目指すことを確認した。

2003PC カンファレンス 第2回プログラム委員会報告

日時: 2003年3月21日(金) 11:00 ~ 15:00

場所: 鹿児島大学都元キャンパス 喫茶ガロア

出席: 佐藤、板倉、宿久、熊澤、田中、税所(以上鹿児島大学教員)、川端(鹿児島西陵中学校)、上村(北九州市立大学)、大岩(大分大学)、松田(CIEC副会長/立命館大学)、小野(東京大学)、吉田(摂南大学)、福島(九州事業連合)

オブザーバー: 橘(CIEC小中高部会/早稲田大学高等学院)

欠席: 末永(鹿児島純心女子短期大学)、矢部(副会長/信州大学)、若林(京都大学)、武沢(厚木南高校)

事務局: 小林、野口、西垣内、羽田

討議内容および確認事項:

1. 第1回プログラム委員会以降の進捗状況と今後の実施課題の確認

(1) 全体会、講演会、シンポジウムについて

<全体会スケジュール>

・挨拶1人5分程度で、以下の方に確定。詳しいスケジュールと最終依頼を改めて正式に出す。

鹿児島大学学長 永田 行博

PCカンファレンス実行委員長 佐藤 宗治

鹿児島県教育委員会教育長 福元 紘

<講演会>

テーマ: 「情報教育のめざすべきもの」

講演者: 村上陽一郎(国際基督教大学)

講演趣旨は、リーフレット掲載(4月15日)までに確定。

<シンポジウム>

司会: 赤堀 侃司(東京工業大学)

パネリスト: 辻 慎一郎(三島村立三島小中学校)

廣原 俊一(国分市立青葉小学校)

大橋 真也(千葉県立東葛飾高等学校)

川合 慧(東京大学大学院総合文化研究科)

生田 茂(都立大学/元CIEC副会長)

・パネリストを1名追加した。シンポジウム企画趣旨については、パネリスト間のメーリングリストにて確定を図る。また、司会の方、パネリスト、企画担当との間で、簡単な事前打ち合わせを計画していく。

<その他>

・リアル配信の実施、稲盛会館の講演会場外の場内映像配信を計画する。講演者、パネラー等の事前了解を求めていく。会場内の参加者については、その場で了解を取る。

(2) 分科会について

<分科会レポート応募状況と採択結果>

・2003年2月28日(金)に受付締め切り 150人(九州全域30本) 高等教育機関教員72名/初等中等教育機関教員25名/学生・院生39名/大学職員9名/生協職員2名/

その他3名

・著作権承諾 分科会レポート141本/ポスターセッション9本

<時間割編成会議の報告>

・口頭発表希望者が多いため、教室数を6→8とした。

・ポスターセッション希望者が少ないことから、2→1部屋とした。また、3日目に予定されているポスターセッション説明時間を中止し、2日目だけとした。

・次年度分科会課題として、締め切りの完全厳守、テーマ選択時の説明文書の作成を確認した。また、検討課題として、キーワードを募集時に集約するかどうか検討してもらうこととした。

<分科会レポート応募資格変更に伴う応募状況の変化>
CIEC会員77名/入会予定25名/非会員(小中高資格)11名/非会員(大学生協組員資格)37名

登壇者以外にも共著者の入会予定があり、約40名程度の入会予定者を数える。

当初心配された入会資格に伴うトラブル等は、皆無であった。

<ネット接続希望と対応について>

ネット接続希望は37名。対応については、以下のとおりとすることを確認した。

・自分の責任においてネット接続設定ができる方のみ接続を認める。

・ネットトラブルを考慮し、接続できない場合の対応を個々人用意してくるよう要請する。

<発表論文原稿の提出媒体および案内について>

以下の内容を確認し、その提出案内については、分科会担当で確認することとした。

・6月13日(金)を提出期限とし、遅れた場合は白紙にタイトルの掲載とする。

・提出原稿は、紙(完全版下原稿)とPDFファイルとする。ただし、PDFで用意できない場合は、デジタルファイル(Word、LaTeXのdvi、PSのいずれか)でも受け付けるが、時間の関係で文字化け等が発生することもある旨断り書きを入れる。

・提出原稿については、見本を付けるとともに、編集レイアウト等を指示する。

<分科会運営について>

・分科会運営の方法については、分科会1コマのタイムスケジュール(発表20分、質疑応答5分)変更以外は、昨年のマニュアルのとおりとすることを確認した。なお、発

表終了合図についても、基本的な確認はするものの1コマ以内で司会者の裁量に任せることを確認した。

・ネット接続希望者については、接続時間についても発表時間に含める旨、事前に通知することとした。

・司会者からの報告は、昨年までの形式ではなく、アンケート形式のものとする。

(3)各企画の概要について

<各企画の計画書の提出について>

・Wordの運営計画書書式に従い、リーフレット掲載内容の提出を4月15日までに、使用機材以下の項目については6月第3回プログラム委員会までに提出し、常に実行委員会担当者・事務局間で情報共有ができるようWebにあげることにした。

・初日夕方からの「参加者トーク-本音で語ろう情報教育-」は、小中高で提出してもらうことを確認した。

<開催地企画「メディアとe-Learning」>

14:00~14:10 開催地企画の企画趣旨に関する挨拶と連続する企画のご案内

14:10~15:40 第一部 講演2本

(質問も含めて1時間30分)

1)松田和司(BBC World ディストリビューション ジャパン株式会社代表取締役社長

2)Dr. Patric Cross (BBC World Limited Managing Director)

15:40~15:50 休憩

15:50~18:00 第二部 報告3本

(質問と休憩を入れて2時間10分)

1)アルク教育者で予定(今後変更もあり)

2)日立電子サービスラーニング事業部角崎正人部長で内定しています。商用ベースでのe-Learningプラットフォーム標準化への取り組みが紹介

3)exCampusというメディア教育開発センターが提供する国産e-Learningプラットフォームの概要紹介とプロモーション

BBC Worldの講演については、事前に資料を配布し、同時通訳は実施しないこととした。司会進行については、第一部・二部に分け、九州地域の外国語教育部会の方をお願いすることとした。

<国際交流企画>

・招聘要請しているAsPEN事務局長のProf. Alex Mazzolini氏が4日間ご出席いただけるとの報告がされた。なお、講



演テーマおよび講演趣旨については、現在要請中であることの報告がされた。

・司会進行役は、小林先生(新潟大 / CIEC 運営委員)にお願いし、講演内容について事前資料配布を行い、質問のみ通訳をすることを計画した。

・翻訳を入れないと、折角の貴重な国際交流企画としての期待が半減するとの意見が出され、同時通訳を含めて、より会場参加者に理解されやすい提供方法を検討していくこととした。

< 生協職員部会研究会 >

・第一次案が提案され、確認した。

< 学生企画について >

・学生の企画立案、運営支援を鹿児島大学生協 小林専務に一任することとした。

< ITフェア、ITプレゼンテーション >

・ネット接続は各社で対応することとし、実行委員会では対応しない。

< その他 >

・リーフレット最終ページの申し込み案内と前頁の地図をあわせて、1枚とすることとした。

・リーフレットに挟み込むオプション企画や宿泊等の案内も4月15日締め切り確認した。

2. 2003PCカンファレンス運営計画に関する確認と討議

(1) タイムスケジュールの変更と確認

・全体会、講演会を13:00～15:00とする。

・シンポジウムは休憩を含み15:15～18:00とする。

・CIEC総会を第3日目12:45～13:45とする。

・CIEC理事会を第1日目9:30～11:30に予定する。

(2) 開催場所(原案)に関する確認

・ITフェア会場について、前回4階以上のフロアを計画したが、エレベータ搬送が困難なことから、当初計画の1階および2階フロアでの実施を計画することとした。

・ITフェア会場のエアコン問題については、エアコンが効くとのことであるが、7月頃に確認を実施し、できるだけ

の対策を打つこととする。

(3) 名誉実行委員長、後援依頼に関する進捗報告

・永田鹿児島大学学長に名誉実行委員長にご就任いただいた。

・新たに、NHK鹿児島放送局、家庭教育新聞社から後援をいただいた。

・開催地の新聞社、放送局等については、取材依頼のみを行うことを確認している。

(4) ポスターデザイン決定の件ほか

・出席実行委員の意見を入れて、一部修正のうえ、ポスターデザインを確定することとした。

・残されたポスターデザインは、開催地企画のポスターとして、九州全域で使うこととした。

・ポスターおよびリーフレットの表記は、「PCカンファレンス」とし、論文集は英語表記を継続することとした。

・たて看板等の案内板の色調については鹿児島大カラー(緑系)とし、PCカンファレンスの案内はカタカナ表記とすることとした。

3. 今後のスケジュール

(1) リーフレット掲載原稿の締め切り 4月15日

(2) ITフェア、ITプレゼン受付中

(3) リーフレット配布、Web参加申し込み実施(連休明)

(4) 第3回プログラム委員会 6月21日(土)

当日運営計画に関する詳細打ち合わせ

<新会員紹介>

CIEC 入会に際して

CIEC の会員になって

国際基督教大学
小澤 伊久美

北海道大学大学院工学研究科助手
青木直史

このたびCIECに入会しました北海道大学の青木直史と申します。大学院工学研究科、電子情報工学専攻、計算機情報通信工学講座に所属しており、コンピュータによる情報通信の高度化について研究を行っています。専門分野は音声情報処理で、インターネット電話に代表される音声メディアを利用したウェブアプリケーションの開発を研究テーマとしています。最近では、インターネット電話の他に、インターネットを利用したマルチリンガル音声合成システムの構築にも取り組んでいます。どちらも、インターネットというインフラがあればこそその研究テーマですが、特に、マルチリンガル音声合成システムでは、研究を推進する上でもインターネットが重要な役割を演じています。マルチリンガルなアプリケーションを開発するには世界中の研究者とのボーダレスな協力が重要な要素となりますが、オープンなコミュニティの形成を可能にするインターネットの利用により、こうした研究を効率的に推進することが容易になってきたことは非常に喜ばしいことと感じています。

しかしながら、研究におけるコンピュータの利用が日常化したことで、日々、際限なくコンピュータの画面を眺める研究姿勢にならざるを得なくなってきたことに対しては、多少なりとも不健全さを感じています。自然科学に分類される研究分野を守備範囲としているとはいえ、プログラム作成可能なシミュレーション実験をいつも相手にしていると、結局、頭の中で考えたことしか想定できず、本来の自然現象に対する観察力がどんどん低下していくのではないかと、との危惧の念があります。コンピュータのみに閉じた世界では、瞬間的な知的好奇心を得ることは簡単でも、思わぬ新しい発見を期待するのは容易ではありません。こうしたことから、コンピュータを使いこなしながらも、コンピュータに頼り切らないバランス感覚を兼ね備えた人材を育成していくことが、高等教育に携わる者として、これからのIT社会をより健全なものにしていくための重要な課題だと考えています。CIECの活動はコンピュータの適切な利用の啓蒙を目標の一つにしていると理解していますが、微力ながら、今後、その一翼を担えればと思う次第です。

はじめまして。東京にある国際基督教大学で留学生や帰国生に日本語を教えている小澤伊久美と申します。

日本語を教え初めた頃は読解教育・論文執筆指導などの非常に具体的な教授法のあり方やカリキュラム・デザインに関心があったのですが、最近は「言葉を学ぶとはどんなことなんだろう？」という根源的な部分についても考えることが多くなりました。そもそも「学ぶ」こと「教える」こととはどういうことか？という疑問に向き合う日々であるといってもいいかもしれません。その中で、学生だけでなく教師自身の学びといったことにも関心を持つようになり、現在、教師教育のあり方について同僚と共同研究に取り組み始めたところです。教師のネットワーク形成・情報収集・事務処理の効率化などといった意味でもコンピュータ技術に負うところが大きであると感じておりますが、この数年の間に授業活動の中でもコンピュータを使うことが増え、コンピュータを利用した教育についてもっと勉強して授業に生かしたいと思うようになったのがCIEC入会の動機です。

私の勤務する大学は3学期制ですが、この2学期間続けて上級レベルの留学生の書き方のクラスを受け持ち、主に論文執筆を指導しました。毎年このクラスを担当するわけではありませんが、担当する度に論文執筆の資料にウェブで見つけた資料を用いる学生が増えてきたように感じます。初めてそのような学生に出会った頃は、論文の最後に挙げる参考文献一覧にはそれをどのように記載するかといったことが問題でした。けれども、この2学期間で感じたのは、学生は自分のほしい情報を探しては来るのですが、その情報が誰によって何のためにどのような事物に基づいて提示されたものであるか気にしない者が多いということです。コンピュータの操作には慣れていることが決して十分なIT literacy(media literacyですね)を身に付けていることを意味しないということを感じました。教育においてコンピュータを利用するといった場合に、実はこういった単純な「ウェブページを読む」といった活動についても、実施する意味、そしてやり方を私自身再考する必要があると思った次第です。

これからCIECでの多種多様な活動に多くの刺激を受けて学んでいきたいと考えています。どうぞよろしくお願いたします。



コンピュータの活用によって「やらされる」から「やりたくなる」教育へ

京都大学経済学部経営学科
若林靖永ゼミ 片岡 亮

今までの教育、特に英語教育を考えると中学に入学して以来ずっとテキストで英語を学んできたのではないかと思います。私はなぜテキストで勉強しなければならないのか考えたことがあります。その答えとして、私は今の英語学習システムは全て、「学生にテストをして成績をつけること」「学生をテストして合格・不合格を決めること」を大前提にしているのではないかと思います。誰もが、話せたり、聞き取れたりできる方が文章を読むことよりも大事だということがわかっているのに、リスニングやスピーキングの試験をすることが難しいがゆえに、テストがしやすい「読解」や「英作文」をテキストで教える羽目になっていると思います。そこには「学生が英語を使いこなせるようにして、少しでも幸せな人生を送ることができるようにする」という考えは、全くと言っていいほど入っていないと思います。誰だっていきなり、テキストを渡されて、文法や単語を教えられ、テストをされたりすれば嫌いになりかねないと思います。

私が中高生のとき、そして大学生になり塾で講師をしているときに学生の中で英語が得意な人や英語が好きだという人に、そのきっかけを尋ねることがありました。そしてそのときの答えは100%と言っていいほど「洋楽が好きだったから」「洋画を見て、外国の人と話がしたいと思ったから」「ホストファミリーやホームステイをして、外国人の人と話したら通じたことが嬉しかったから」などすべて、リスニングやスピーキングに関するものでした。誰でもCNNニュースなど英語のニュースが聞き取れたり、好きな歌手が歌っている英語の曲の歌詞の意味がわかったり、外国人と話をして通じたり、好きな俳優のせりふが聞き取れたりすれば感動すると思います。そこでコンピュータを通じ、さらにインターネットを活用することにより、海外のニュース、天気予報、音楽、映画に触れてもらい、「英語を学びたい」とまず学生に思ってもらい「英語を学ぶ意義」をしっかりとわかってもらうことが大切なのではないかと思います。つまり既存の教育システムにとらわれることなく、英語の楽しい部分をたっぷり見てもらうことで、文法や単語を覚える意味を認識し、より一層英語の学習を楽しんで欲しいと思います。テストの成績を上げるための勉強ではなくて、将来、

英語が話せたり聞き取れたりするようになるための勉強の方がずっと「やりたい」と思うし、「楽しい」と感じられるのではないかと思います。そして「教育によって、学生が将来豊かで幸せな人生を送ることができる能力を少しでも身につけること」ができればと思っています。

以上が、私がコンピュータを通じることによって、今の教育が少しでも変わればと思っていることです。

e-Learning用の工学基礎コンテンツの開発に従事

金沢工業大学情報処理サービスセンター システム部

研究員 山本 敏幸

金沢工業大学情報処理センターの山本敏幸です。2003年の2月に正式会員となりました。といっても、CIECとのお付き合いは長く、本学の島田洋一教授の勧めもあり、2001年のPCカンファレンス・金沢大会よりCIECのお世話になっております。これまで、教育支援システムやインフラについて発表をする機会を与えていただき、意見交換やディスカッションをする機会を得、いろいろな方と知り合うことが出来ました。感謝いたします。

専門はメディア・テクノロジーです。去年の3月までアメリカにいましたので、主に、AECTという教育工学の学会などで、インタラクティブティやフィードバックを盛り込んだオンライン教材の開発研究、オンライン教材のコンテンツ・デリバリーメソッドと学習者のパーソナリティの相関関係などについて発表をしてきました。

インディアナ州立大学にいた際に、遠隔教育やオンライン・オンキャンパスのハイブリッド型の教育支援教材の開発部門でサーバ管理、プロジェクトマネージャー、コンテンツ・コンサルタントとしても従事しておりました。教材コンテンツ作成はCourseInfoやWebCT上のコースに載せるものが大半でした。

現在は 金沢工業大学、情報処理センターで本学のニーズに合わせたe-Learning用の工学基礎コンテンツの開発に従事しています。

どうぞこれからもよろしく願いいたします。

CIEC の会員になって

富山大学留学生センター
深澤のぞみ

富山大学留学生センターの深澤のぞみと申します。このたび、CIEC に入会させていただきました。

私の専門は外国人学習者への日本語教育で、富山大学に所属する留学生に対して、日本語の指導を行っています。ここ数年は、それと並行して、ずっと留学生に対するコンピュータリテラシー教育に関心を持ち、基礎研究を行ったり、教材を開発してきたりしてきました。

昨今のITの重要性についてはあらためて言うまでもありませんが、大学での学習や研究の成否にも、コンピュータリテラシーを持っているかいないかが大きく影響します。外国人留学生は、コンピュータそのものの操作に不慣れな場合も多々ありますし、また、操作方法そのものには習熟していても、日本語環境での使用の経験はない場合がほとんどです。

外国人学習者が日本語環境でコンピュータを操作する場合、日本語能力が十分でないために、さまざまな問題が生ずることがあります。たとえば、日本語のコンピュータ用語の漢字が難解だったり、もとの英語の用語と微妙に違うカタカナ表記語が理解できなかつたりすることがあります。また、日本語を入力することが意外に難しく、小さい「っ」や「ん」、長音などが正確に入力できないことがありますし、それに伴い、目指す漢字にもうまく変換できず、びっくりするような言葉に変換されていたりするようなことが起こります。

留学生のこのような問題を克服して、大学での学習・研究活動を支援していこうというのが目的で、同僚たちと『留学生のための日本語コンピュータ』（コンピュータ入門教材）と『留学生のためのコンピュータ用語集』という、二つの教材を開発しました。留学生に対するコンピュータ授業をいくつか開講していますが、これらの教材は、この授業の中で活用されています。

これからは、次の段階として、忙しい留学生のために、いつでもどこでも、学習したいこと必要なことを学べるような、eラーニングのシステムを作れないかと考えているところです。私はコンピュータそのものの専門家ではないので、知識や技術をあまり持っていません。CIECでいろいろ勉強させていただきながら、開発を進めたいと考えております。よろしく願い申し上げます。

激動のパーソナルコンピュータ 発達史とともに

北海道文教大学外国語学部
曾我聰起

この度、CIECに参加させて頂くことになりました北海道文教大学・外国語学部（恵庭市）の曾我聰起と申します。大学では一般情報処理教育を担当しております。本格的にコンピュータと関わりあうようになったのは、大学を卒業し某社のシステムエンジニアになってからですから、かれこれ22年になります。この会社に勤務するうちに、情報教育の重要性を実感し、16年ほど前に情報処理の専門学校（旭川市）の教員となり、この道に足を踏み入れることになりました。その後、1990年からは、現在の大学の母体となった北海道栄養短期大学・生活文化学科（札幌市）に勤務することになりました。

私の世代はパーソナルコンピュータの黎明期を過ごした世代であり、その後、マルチメディアの時代を経験するなど、パーソナルコンピュータの発達を目の当たりにしてきました。今振り返ると、この経験は誠に貴重なものでした。ご承知の通り、世界初のパーソナルコンピュータ（当時はマイコンなどと呼ばれていました）はMITS社のAltair（アルテア）でした（1974）。その後、現在のパーソナルコンピュータの形態に近いApple IIが登場します（1977）。私が学部生だったのが1977～1981年ですから、正にパソコンと共に歩んできた半生でした。

私が自分のパソコンを購入したのは、専門学校時代の1988年のこと。購入したのはApple社のMacintosh Plusでした。メインメモリーが2MB、ハードディスクは外付けの20MBでした。この非力なマシンでExcelのVer1.0Jを動かし、学生からの徴収金などを整理していたわけです。その後、90年代に入りますと、マルチメディアの時代になります。上述の北海道栄養短期大学・生活文化学科では情報文化コースという課程で、マルチメディアを中心にした一般情報処理教育を行ってきました。当時の学生たちは、時代の先端技術に目を輝かせながら学習してくれました。その後、1995年にはHTMLの授業を始めましたが、まるで昨日のこのように思えます。

この10年間を振り返りますと、ハードウェアの性能向上には目を見張るものがありましたが、ソフトウェア環境が大きく変わったという印象は余りありません（ただしinternetの普及は別です）。そろそろ次の時代への助走に入ったのかもしれない、そんなことを期待している今日この頃です。



メーリングリスト登録のお願い

1. 事務連絡用：kaiin@ciec.or.jp は、事務局にて一括登録します。

(1) 事務連絡用メーリングリストで流す内容（全会員に共通するお知らせ）

- ・年会費の納入についてなどの事務的なお知らせ
- ・CIEC総会に関するお知らせ
- ・PCカンファレンスに関するお知らせ
- ・CIEC主催研究会に関するお知らせ
- ・その他共催する行事のお知らせ（後援する行事は、talk@ciec.or.jp でお知らせします）

※ 会員の方からの上記に関する問い合わせや意見は、事務局への返信のみとなり、今までのように全会員に情報が流れることはなくなりますのでご安心ください。

(2) 会員の方のアドレスの登録・削除・変更について

- ・アドレスは複数登録が可能です。必要な方はお申し出ください。
- ・変更等がある場合は、必ず jim@ciec.or.jp までお申し出ください。
- ・どうしても登録してほしくない場合は、事務局までお申し出ください。

2. 話題提供、情報交換のために積極的にご登録、ご協力ください。

以下のメーリングリストは、会員の方自身がお自分でご登録いただくメーリングリストです。

それぞれのメーリングリストは、CIEC の各専門委員会および研究部会世話人会の方々が参加しており、積極的に日常の事業活動に反映していきます。是非ご活用ください。

<事業活動に関する ML>

- ・talk@ciec.or.jp 活動全般にかかわる会員間の自由な情報交換を目的としたもの
- ・kaishi@ciec.or.jp 会誌「Computer & Education」の活動協力を目的としたもの
- ・confpro@ciec.or.jp 全体研究会等への活動協力を目的としたもの
- ・ciecnet@ciec.or.jp ネットワーク活動全般への活動協力、相互支援を目的としたもの
- ・intercomm@ciec.or.jp 国際活動にかかわる活動協力を目的としたもの

<研究部会活動に関する ML>

- ・f-lang@ciec.or.jp 外国語教育研究に関する ML
- ・ps-ed@ciec.or.jp 小中高校教育に関する ML（関連する大学教育の論議も含みます）
- ・sougou-ps-ed@ciec.or.jp 小中学校の総合教育に関する ML
- ・text-ps-ed@ciec.or.jp 小中高部会副読本に関する ML
- ・science@ciec.or.jp 自然科学分野での教育研究にかかわる ML
- ・coopers@ciec.or.jp 学びと教育研究支援に関する生協の役割を考える ML
- ・iej@ciec.or.jp インタラクティブな教育のあり方を研究・実践するための ML

（登録・削除・変更等の方法につきましては、「MLにおけるコマンドメールの使い方」を参照ください。）